

伊方原発3号機再稼働 ゲート前、抗議の声

大分合同新聞 8 月 12 日夕刊

【大分合同・愛媛伊方特別支局】大分県に近い四国電力伊方原発3号機(愛媛県伊方町)が12日、再び動きだした。東京電力福島第1原発事故後の定期検査で全3基が停止して以降、原子炉が起動するのは4年7カ月ぶり。伊方原発のゲート前には愛媛、大分など全国から再稼働に反対する人たちが集まり、「住民の命と暮らしを無視した再稼働だ」と抗議活動を展開。「本当の闘いはこれから。諦めずに運動を続ける」と誓った。

ゲート前の道路には柵が設けられ、警備の警察官がずらりと並んだ。そばでは「再稼働絶対反対」などののぼりを掲げた約 150 人が「原発止めろ」とシュプレヒコール。その中には、今夏に伊方 3 号機の運転差し止めを求める仮処分を大分地裁へ申請した杵築市の農林業中山田さつきさん(62)の姿もあった。中山田さんは 1979 年に起きた米スリーマイルアイランドの原発事故をきっかけに、原発の危険性を知った。86年にチェルノブイリ、そして 2011 年には福島一。「ついに起きてしまった」と衝撃を受けた。

「原発と命は共存できない」と反対運動を続け、「伊方原発をとめる大分裁判の会」では原告団の共同代表になった。九州電力川内原発（鹿児島県）、玄海原発（佐賀県）の差し止め訴訟の原告にも加わる。空気が澄んだ日には、国東半島から伊方原発がはっきり見える。「とても近いし、遮る物は何もない」。事故で放射性物質が漏れれば大分への影響は計り知れない、と感じている。

大分は原発立地県とは違い、再稼働に必要な「地元同意」の手続きで「かやの外」だった。「何かあれば被害を受けるのに、そんなふざけた話はない」。大分の住民が声を出すのは当然のことだと思っている。

伊方3号機を巡っては、大分、松山、広島、の3地裁で、運転差し止めを求める仮処分が申し立てられており、司法判断に注目が集まる。

大分裁判の会はできるだけ多くの県民に原告になってもらい、9月までに訴訟も起こす予定だ。ゲート前で拳を上げた中山田さんは「古里を守りたい。再稼働は悔しいが、絶対に諦めない。止めるまで訴え続ける」と力を込めた。



伊方原発のゲート前で再稼働に抗議し、仲間とシュプレヒコールを上げる中山田さつきさん。「止めるまで、諦めずに訴え続ける」と誓った＝12日午前9時11分

不安噴出「なぜ動かす」

「能本地震踏まえ 大分の裁判重要」



55

「備えは充実」県強調

大分の街頭でも抗議の声を上げました

